

問一

本来の演劇は、観客が囲い込まれた舞台を静かに眺めるものではなく、劇場全体において、主体である観客が問い演者が応じるという動的な営為であるということ。

（解答欄 3 行）

問二

観客の反応とは無関係に固定された物語を展開する映画には、時機を逃さぬ拍手を観客に促し以後の物語を進行させるといふ演劇のダイナミズムは生じてこないから。

（解答欄 3 行）

問三

近代劇の観客は、日常を模倣するだけの舞台を見させられる受動的な存在に甘んじるよりも、舞台を作り出す側にまわりこんで、わずかに主体性を補おうとするから。

（解答欄 3 行）

問四

自由な精神の運動によって生み出される本来の芸術は、制作者と享受者の応答によって成立する主体的な営みであるが、芸術が日常の模倣と化した近代では、制作者も享受者も他と精神的に呼応することを拒絶し、自我を補強する材だけを芸術に求めようとしているということ。

（解答欄 5 行）

問一

死者は、その記憶を美しく保存する生者の生を更新しつつ存在し続けており、忘却が死者を真の死に至らしめるから。

（解答欄 2 行）

問二

死の予感に苛まれている病者にとっては、他者の死が堪え難い死の不安に自己をさらす機縁となるために、他者の厳粛な死を深く悲しむことを回避しようとするということ。

（解答欄 3 行）

問三

苦しみや不安を抱えつつ純粹な生を全うした名もなき無縁の死者の歌集に筆者が生の普遍性を感じ、悲しみとともに感動したように、他者の死を深く悲しむことは、生者の精神を浄化し、生のかげがえのなさを感得させるということ。

（解答欄 4 行）

問一

新君が、先君の喪を短時間で切り上げ、従来の政治を性急に改めると、新君への称賛は先君への非難に通じ、新君が我が身の才を誇って代替りを待望していたように見えるから。  
（解答欄 3 行）

問二

先君の時にこの上なくもてはやされた人は、今は無用な人のようになり、一方、谷の埋もれ木に花が咲くように、誰にも顧みられなかった人で一転して栄華を誇る人もいる。  
（解答欄 3 行）

問三

権力におごらず、臣下を思いやり、民衆を慈しんだ新君も、時とともに安逸と贅沢に流れ、先君と同じような凡庸な為政者になってしまうことが残念だということ。  
（解答欄 3 行）